

障がい児の余暇活動について

— 実践を通じた交流と支援から学ぶ —

齊尾 理菜

はじめに

2012年の3月に「余暇支援サークルニヤッキ！」を保護者と学生が協力し、月に1回、学生と家族の方の意見を合わせ、活動内容を企画した。

現段階では子どもだけの参加ではなく、特別な理由がない限り家族同伴として活動を継続、展開している。

サークルでは月1回、学生が子どもたちと一緒に活動することを主眼としている。

そして、その活動の中で遊ぶだけではなく、学生、保護者、子どもたちとの関係の中でルールやマナーを学んだり、コミュニケーションの能力を発達させていくなど、障がいのある子どもの社会参加の一步に繋がって行くことができるのではないかと考えるようになった。

そこで、障がいのある子どもたちの余暇に関する活動と支援を調査し、子どもたちの余暇支援のあり方について、子どもたちが余暇活動に参加することでどのような影響を受けているのかを整理し、さらに活動が大学・地域に根付くにはどのような方法があるのかを検討することにした。

考察を展開する研究方法としては、余暇についての文献、障がい児・者の余暇の実態やニーズ、課題を文献で調べ、日本の障がいのある子どもにおける余暇支援の研究を調べることから始めた。

さらに余暇支援サークルの活動がどのように展開されてきたか、参加している子どもにどのような影響を与え、どのような場所なのかを余暇支援サークルに参加している知的障がいのある子ども（本考察では小学校3年生～中学校1年生の知的障害のある児童生徒8名と兄弟・姉妹の4名）の保護者の方にアンケート調査を行った。

I 障がい児と余暇支援

1 日本における障がい児の余暇指導

わが国における障がい児への余暇指導の不十分さは、社会的支援の未整備が、重度知的障がい者の余暇支援の困難さ、あるいは余暇支援の未確立という問題につながっているといえる。

ここでは、知的障がい児（者）の余暇活動への彼らの参加を制限しているのは、能力ではなく、機会の欠如だと考える。余暇生活における活動内容の制約、余暇を共に過ごす仲

間の少なさということ自体は、現代の日本においては重度知的障がい者だけの問題とはいえない。

一般的には、子どもにとっての余暇は、睡眠や食事の時間、学校や塾などの子どもとしての義務的な時間などを除いた自由な時間を意味するが、それは行動面からみれば「遊び」そのものであるといえる。

子どもにとっての遊びは、人間の成長発達にとって欠くことのできないものであり、その基盤となるものである。ことに幼少期には、遊びと学習をはっきり区別することは困難であり、子ども時代には、遊びや学習以上に重要な面も少なくない。その意味で、子どもの遊びを保障することは、子どもの発達を保障することと同じである。

さて、わが国での学校における余暇活動のルーツのひとつとしての学校レクリエーションの考え方は、1977（昭和 52）年の小・中学校学習指導要領で出された「ゆとりの教育」によるところが大きい。そして遅れて、障がい児の余暇の充実の重要性が指摘されるようになってきたのは、1992（平成 4）年の隔週学校 5 日制が導入された頃からである。

文部科学省による学校週 5 日制は、子どもたちの生活全体を見直し、ゆとりのある生活の中で、子どもたちが個性を生かしながら豊かな自己実現を図ることができるよう、平成 4 年 9 月から月 1 回、1995（平成 7）年 4 月からは月 2 回という形で段階的に実施されたのである。

1996（平成 8）年の中央教育審議会においても、子どもたちに「ゆとり」を確保する中で、学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、子どもたちに生活体験、社会体験や自然体験など様々な活動を経験させ、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育むため、完全学校週 5 日制の実施が提言され、平成 14 年度から完全学校週 5 日制を実施させた。

武田ら（2006）は、全学校週 5 日制に対応して検討を要する取り組み課題として、① 卒業後の将来の生活に向けての見通しをもって知的障害児らが主体的に余暇活動を楽しめるような教育の取り組みを充実させること、② 地域における活動を増やせるような社会的環境の整備、健常児とのふれあいも含めた活動の企画、個々のニーズに応じた柔軟な福祉サービスの充実を図ること、③ 地域、家庭、学校 3 者の連携を強化させた取り組みをおこなうこと、ということを列記している。

学校完全週 5 日制により、子ども達が家庭や地域で過ごす時間が増えるという現実には、学校が在籍児の余暇や地域参加の重要性を再認識させることに結びつくことになった。

一方、学校教育の現場では余暇指導についての取り組みが実践・研究としても蓄積されはじめている。その考察視野を北海道に限定してみても北海道教育大学教育学部付属の特別支援学校において余暇を楽しむための指導が個々の授業場面に反映されているという報告が出されている。（北海道教育大学教育学部付属養護学校＜1999＞『研究紀要 22 集』）

しかし、余暇に関する指導体制や指導場面を含めて明らかにした報告や地域における余暇支援に関する実践と研究は少ないのが現状である。たしかにこれまで、障がい児の放課後・学校休業日の生活保障を求める運動は、養護学校義務教育化を契機として、すべての子どもに教育を受ける機会を保障する運動や 1980 年代後半の高等教育への希望者全員の

進学を求める取り組みに続き、全国での生活実態調査が実施されてきた経緯がある。

渡部・野波・海塚・南出（2000）の調査は、学校週5日制が、健常児に比べて家の中で過ごすことが多くなる障がい児やその家族に及ぼす影響が大きいことを指摘した。

障がいのある子どもたちにとって余暇を有意義に過ごすことは、将来の生活に重要な影響を与えると考えられるのである。

21世紀の特殊教育のあり方に関する調査研究協力会議（2001）は、余暇の過ごし方について、「完全学校週5日制の実施を見据え教育委員会は学校・地域社会と連携を図りながら障害のある児童生徒等が、社会の一員として主体的に活動し、自立し、社会参加するための基盤となる『生きる力』を培うため、地域の様々な活動を行い、福祉団体やボランティア等の協力を得て地域の様々な活動に参加する等の機会を充実するとともに、活動に関する情報を提供し、体験活動の機会の充実に努めることが望ましい。」ことを示した。

この望ましい体験活動を実現するには、学校と地域において余暇支援を行うことができる機関、団体、人材が連携し共に協力して支援することが必要であると考えられるのである。

2 障がい児(者)余暇の現状

知的障がい養護学校における夏季休業中の余暇支援に関する検討による保護者へのニーズ調査に関する調査では、保護者が夏休みの過ごし方について困っている理由を大きく「保護者自身が感じる困難」「子どもの生活上の問題」「外出の困難」に分けることができ、保護者の感じる困難には共通性があることを明らかにした。

保護者が夏季休業中に困っている理由は、単調な生活で運動不足になり、外出にも不自由を感じ、親子でストレスがたまり困っているというものであった。

子どもの年齢が低く障がいが重いほど、福祉関係の施設、養護学校、ガイドヘルパー・ボランティア、障がい児と一緒に、少人数で屋外遊びを中心とした活動を希望し、年齢が高く障害が軽いほど、ガイドヘルパー・ボランティア、家族と一緒に個別で外出を中心とした活動を希望する傾向があった。

そこでは、市町村と都市部で、希望する余暇支援活動内容の傾向に地域差がないことが示された。

調査から知ることができることは、家庭の中では、テレビ・ゲームなど限られたものをするしかなく、その分家族が買い物やドライブ等に連れて行くという現状である。自転車に乗れる障がい児は行動範囲が広がるが、そうでない障がい児は交通機関を使って一人で遊びに行くということも少なく、これは、近所に友達がいないということだけの問題ではなく、遊びを知らない、つまり、余暇を過ごすための手段や方法が限定されているといっても言い過ぎではない。

障がい児の地域生活や余暇を支える地域福祉サービスにおいては、学齢障がい児は「ブラックゾーンにいる」と言われる。就学前や学校卒業後の公的な生活支援サービスが比較的厚いのに対して、学齢期には公的サービスが教育サイドへと一気にシフトされてしまい、福祉サービスが分断されるという現状があるからである。

学齢障がい児は、家庭と学校以外に地域の障がい児地域生活支援事業の取り組みについての活動の機会が乏しく、休日や放課後などの余暇時間がなかなか豊かな活動を得られないのが現実である。

その理由の一つとして家庭が中心となって、テレビを見たり、何となくのんびり過ごしたりと単調な過ごし方となっている様子が推測される。これは、① コミュニケーションスキルや社会的スキルの弱さ、対人関係の困難さなどを抱える知的障がい児らに対して、地域社会で活動するための機会や活動に際する場所や交通手段や付き添う人などの条件整備が不十分であり、専ら保護者がその余暇活動を支援するには負担も多く限界がある、② 余暇活動につながるような経験の不足から、余暇に何をすればよいか分からずにいる、ということが要因として考えられるのではないだろうか。また、余暇の過ごし方の重要な視点の一つとして友達と遊ぶことが少なく、散歩や公園での遊びなども特に母親や兄弟などが相手をしている場合が多いことも一つの特徴として見られる。

知的障がい児らをめぐる余暇生活の現状としては、前述の通り、家庭が中心となっていることから、保護者が常に子どもと一緒に過ごし、子どもの余暇を有意義に過ごさせるために野外活動を行ったり、ドライブや買い物に連れて行ったりと努力をしているようだ。そのため、保護者側の自由も限られがちであり、少なからず心身的負担も伴っていると思われる。このことから、必要に応じて保護者の代わりに子どもと余暇を過ごしてくれる人手が柔軟に得られることを必要としていると考える。

「余暇支援サークルニヤッキ！」は、このような現状から誕生したサークルである。

II 「余暇支援サークルニヤッキ！」から学ぶ

1 「余暇支援サークルニヤッキ！」の役割と評価

ニヤッキの役割は、地域で障がいのある子どもたちの余暇をサポートすることである。

現段階では、N市の大学には障がい児者をサポートしていくサークルは「ニヤッキ！」を含め、2つに留まっている。

地域に1つしか存在しない大学であるため、地域と根強い関係があると考ええる。

保健福祉を学ぶ学生だからこそできる活動やサポートがあるのではないかと考える。

地域にはそれぞれニーズをもった子どもたちや家族が存在する。その余暇の支援をしながら、学生や子ども双方が成長していく場が「ニヤッキ！」だと活動を通して学んだ。

「ニヤッキ！」ができたことにより、また支援の幅が少し広がったのではないかと考えている。

当面のゴールは、①子ども、家族との信頼関係を深める。②子どもたちが「ニヤッキにきたい」「楽しい」と思える場所にする。③余暇の中に学びを取り入れていく。④一つ一つの余暇活動が子どもたちにとって好きな活動・嫌いな活動というのを知る場にして欲しい(好きな活動は伸ばしていきたい。)。⑤学生が共通意識を持って活動に取り組みたい。

⑥家族なしで参加できるように体制を立てることである。

2 「余暇支援サークルニヤッキ！」に参加した保護者の希望と変化

本考察では、保護者の方にアンケートを実施した。調査の方法は、郵送回収による質問紙調査であり、質問調査は無記名で行うこと、データ入力の際には個人が特定されないことがないなど、個人情報保護を依頼文に明記し、調査用紙の返送をもって、調査への協力の承諾を得たと判断した。アンケート結果は以下の通りになった。

アンケート結果

1 余暇の時間をどのように過ごしていますか（複数回答可）

- ① 自宅で遊ぶ（テレビ、ゲーム、音楽、本、お絵かきなど）：6名
- ② 屋外で遊ぶ（公園、自転車、散歩など）：4名
- ③ 学習活動（勉強、習い事など）：2名
- ④ 自主サークルの活動、福祉団体主催の活動など：4名
- ⑤ 外出（買い物、外食）：5名
- ⑥ 旅行：0名
- ⑦ その他：1名
 - ・学童やデイサービスを予定

2 現在の余暇の過ごし方について、どう感じていますか〔1つに○〕

- ① 満足している：0名
- ② 困っている：3名
- ③ どちらともいえない：3名

3 上の質問で困っていると回答された方に理由をお伺いします（複数回答可）

- ① 家族と遊ぶなど活動が単調になっている：2名
- ② 楽しめる場所が少ない：0名
- ③ 友だちと遊ぶことができない：2名
- ④ 運動不足になる：0名
- ⑤ 家事の負担が増える：1名
- ⑥ その他：0名

4 一緒に過ごす人は誰ですか（複数回答可）

- ① 家族で：6名
- ② 友だち：0名
- ③ ガイドヘルパー、ボランティア：2名

5 余暇をどのように過ごさせたいと思っていますか(複数回答可)

- ①家族と一緒に過ごさせたい：1名
- ②スポーツをさせたい：3名
- ③勉強させたい：1名
- ④自然に触れさせたい：1名
- ⑤友だちと過ごさせたい：4名
- ⑥家事の手伝いをさせたい：1名
- ⑦趣味のことをさせたい：2名
- ⑧地域の行事に参加させたい：1名
- ⑨習い事させたい：1名
- ⑩ゆっくり過ごさせたい：2名
- ⑪旅行させたい：0名
- ⑫自主サークルの活動、福祉団体主催の活動に参加させたい：4名
- ⑬その他

・自然となんとなくですが、外出する範囲が狭いと家族以外のいろいろな人と関わる機会が少なくなっているように感じる。いろいろな場所・場面で子どもにいろいろな人と関わらせたい。

6 土日の余暇の時間を家族の方の負担はどうですか(1つに○)

- ①とても増えた：0名
- ②少し増えた：3名
- ③今までと変わらない：2名
- ④少し減った：0名
- ⑤とても減った：1名

〈その他の記述〉・S0、ニヤッキ、ふれあい広場など関わることになったおかげで減った。

7 上の質問の①～⑤回答理由を教えてください(記述)

- ・親が連れて行ってのみの行動範囲や経験以上に、家族以外の人々の関わりなどがプラスされると、子どもたちにとってはいろいろな意味で大きな刺激となり、成長するのにプラスになるのではないかと思います。
- ・あまり負担と感ずることもないのが、土・日の場合です。長期休み(夏・冬などは)結構キツイなとも思いつつなんとかこのいで来た感じです。なるべく一緒に買い物や手伝い等もやりますが成長と共にうまくいかない時もあります。
- ・日中は好きなDVDを一人で見ているので変わりません。
- ・いろいろなことをさせたいと思い、親も努力することが増えた。
- ・父親が土日勤務が多く不在になる為
- ・3つの団体(会)に所属しています。また兄だいができたりもして、負担が少し増えた気がするかもしれないです。

8 土日余暇に対する支援を何か受けていますか(記述)

- ・ニヤッキ、スペシャルオリンピックス、ニコニコひまわりの会
 - ・ニヤッキ！を始め、ニコひま、スペシャルオリンピックスと参加していますが、地元のお友達と逢う楽しさもあるようで喜んで行っています。
 - ・ニヤッキ、スペシャルオリンピックスサークル・ニコニコひまわりの会、最近は0学園のデイサービスも入ることができました。
 - ・受けていないと回答：2名
 - ・無記入：1名
- ※ニコニコひまわりの会(ニコひま)：障がい児親の会

9 余暇の支援について、公の機関や地域への要望はありますか(記述)

- ・我家はN市じゃないので違うこともあると思いますが、健常の子らに対しての支援はある(あるように感じる)のに参加させたくても親が一緒じゃないとだめかな…?(勝手かもしれないけど)思うと、年齢が上がるにつれていけなくなりました。サポート人員がいないまたは少ないこともあるだろうけど、どこの市町村でも特別支援学級がある学校・教育委員会は学校以外のサポートを考えてもらいたいと思います。
- ・現実的すぎるかもしれませんが、支援機関などへの金銭的支援(場所なども)、支援機関の設立などの支援。
- ・継続的にサポートしてくれるような社会人ボランティアが増えてくれると嬉しいです。
- ・気軽に利用でき、安全に、様々な活動ができる場所が、各地にあればよいのに…。
- ・要望ではありませんが、今年5月から児童デイサービスが0学園に運営され9月に契約し、10月から週1回利用しています。
- ・無記述：1名

10 障がいのある子どもの余暇活動に不満・不安などありますか(記述)

- ・親の見守りがたえず必要で、親に時間的な余裕がないことがある。親が不在の上での余暇活動も子どもに経験させてあげたい。
- ・今現在は、それほど不満不安はないが、今後は、どこまで親は付き添っていかなければならないのかという、将来的な不安はあります。将来兄だいの余暇活動との兼ね合い具合でうまく参加させていけるかも心配です。
- ・周りへ気を使ってしまい、親が目を離せないのもとても疲れてしまいます。
- ・無記名：2名

11 サークルに入って子どもはどのように変わりましたか(何か変化はありますか)(記述)

- ・他校の友だちと会うことをとても楽しみにするようになりました。
- ・他サークルでは、スキーや水泳など、スポーツにふれるきっかけができ、学校でもスムーズに取り組むことができました。週末になると、サークルに来ている友だちの名前を言うようになって、本人なりの伝え方で「サークルに行きたい」と言っているの

かなと思います。遊び場所ができて、喜んでいるように見受けられます。

- ・同じ学校以外の子どもたちの関わりが出てきた親や学校の先生以外の大人との関わりがとても新鮮なようで嬉しい様子。人慣れしてきた様子。
- ・親と離れて少しは学生さんと一緒に活動できるようになったと思います。
- ・基本、人と関わることが大好きなので変化はありませんが、サークルの仲間や学生さんに逢える事がとっても嬉しいみたいで“大学は?”と聞くことが多くなりました。
- ・お兄さんお姉さんとの関わり、周りのお友だちとの交流でお家でもよく話になります。大きな変化はありませんが確実に少しずつ世界が広がっていると思います。

12 子どもたちはニヤッキをどのように思っていますか(記述)

- ・月に1回のサークル活動なのでとても楽しみにしている様です。
- ・事前に行くことを伝えるとたのしみにする。そこで知りあいになったお友だちや学生さんたちの名前がでてきて、よろこんだりする。
- ・学校以外の友だちや学生さんたちに会って、一緒に遊べる場所、楽しい場所だと多分思っています。
- ・積極的に参加しています。次回の活動を楽しみにしています。
- ・未回答：2名

調査の結果、調査用紙は、8通中6通回収し、回収率は75%であった。

設問1では、「自宅で遊ぶ」他に、回答が多い順に「外出(買い物や外食)」、「屋外で遊ぶ」、「自主サークルの活動、福祉団体主催の活動」、「学習活動」、「学童」、「デイサービスの利用」となった。

設問2では、現在の余暇の過ごし方で「困っている」家庭、「どちらでもない家庭」に分かれたが、満足しているわけではないことが示された。困っている理由(設問3)としては、「家族と遊ぶなど活動が単調になっている」こと、「友だちと遊ぶことができない」が同率であり、他の理由として「家事の負担が増える」という回答もあった。

設問6では、土日の余暇の時間に対しての家族の負担と理由については多い順に、「少し増えた」、「今までと変わらない」、「とても減った」となった。理由については、家庭内の事情、大学のサークルに参加したり、地域での関わりが増えたことによると記述があった。

また、自分自身で余暇の時間にDVDを見て楽しんでいる子どももいる。

この結果から、設問4からも示されているが、ボランティアやガイドヘルパーと過ごすこともあるが、保護者や家族を中心となっている余暇活動が多いのではないかと考える。

設問5では、保護者は子どもたちに様々な余暇活動を取り入れて行きたいことが伺える。

設問8では、大学のサークルの他にも、地域の親の会に参加したり、デイサービスを利用しているなど家庭もあることが示された。

設問9では、地域で継続的なサポートをしてくれる人や機関を設置してほしいという要望があることがわかる。

子どもたちの余暇活動の不安や不満(設問 10)に関しては、「親と一緒にないと活動に参加しづらいこと」、「親から離れて活動させてみたい」、「親の目が離せない」、「将来的にどこまで付き添えばいいのか」など子どもが一人でも参加できる活動を望んでいるのではないかと伺える。

サークルに入って子どもたちに変化はあったか(設問 11)という質問に対しては、他校の友だちや学校以外の大人や学生と関わることを新鮮だと感じていたりコミュニケーションを取ることが好きな子どもたちが多いことがわかる。まだ設立して間もないが、これから学生と一緒に様々な経験をできたらと考える。また、ニヤッキについて子どもたちは現段階では「楽しい場所」として思ってくれている子どもがいることがわかった。

おわりに

最初の活動の日「ニヤッキ！ニヤッキ！」と歌って登場したAちゃん、活動を楽しみしてくれていたと知った。友だちや学生に駆け寄るBちゃん、恥ずかしいながらもサークルのお手伝いをたくさんしてくれるCちゃん、悪いことをして学生に注意され落ち込むDくん、「できた！」と作品を見せてくれるEくん。

このサークルは子どもたちの色々な顔が見ることができる。活動の2回目からは子どもたちに、はじまりの会と終わりの会に役割をもってもらうことにした。3回目からは「僕もやりたい」という意志なのか役割を奪おうとしてしまうFくんがいた。

まだできたばかりのサークルだが子どもたちも楽しそうである。

今年度の活動は、4月「ダンボールで遊ぼう」、5月「お花見をしよう」、6月「大きなシャボン玉をつくろう」、7月「健康の森で遊ぼう」、10月「木夢に行こう」、11月「パンを作ろう」、12月「クリスマス会」、1月「書き初めをしよう」、2月「S町のアイスキャンデルを見に行こう」、3月「1年の活動をアルバムにしてみよう」と学生と保護者の意見を取り入れた計画を立て活動を展開している。

活動から半期を経た今、このサークルは学生にとって、「子どもとの関わりを通して自分自身が成長できるような存在」、「一緒に楽しんで活動する場」、「座学では学べない体験ができる貴重な場」と実感していることがわかった。私たちも活動することで、子どもたちから様々なことを学んでいる。現段階では、月1回という中で信頼関係を築いている段階であるが、今後は役割や活動内容を一人ひとりに合った支援を行っていきたい。

また親元から離れて活動できる体制を整え、少しずつ一人でも活動できるようにしたいと考えている。

余暇活動は、その余暇における活動を通して、人間関係を育てたり、個人の才能や個性を伸ばしたりする可能性にもつながり、生きる上で張りが生まれる。また知的障害児らにとっての余暇は、地域で生活していくための様々な経験による実践的学習の機会ともなり得る点で重要な意義をももっている。

また、障がい者の生活にとって文化活動は、子どもや勤労者にも増して重要な意味をもっている。障がい者の多くはバリアに囲まれて生活することを余儀なくされているが、特

に遊びやレクリエーションに関する障壁は高い。

しかしそれを突破することができれば、障がい者の生活は一変する。

遊びやレクリエーションを含む文化活動は、障がい者が仲間を発見し、市民との多様なつながりを作り出し、さらには自らの生活と人生を意味あるものにする上で欠く事のできない領域だからである。

また、余暇を支援するために必要なこと、つまり、余暇活動をより効果的に機能させるためには、利用する児童・生徒の保護者が考える活動希望の傾向などを事前に調査・把握したうえで企画していくことが重要である。

それは、結果として利用する児童・生徒の年齢や障害の程度をふまえたうえで、活動内容や実施形態、開催期間を考慮し企画すれば、利用する児童・生徒とその保護者のニーズに沿ったより効果的な余暇支援となるものと考えられるためである。

参考文献

- (1) 渡部倍一・野波千代・海塚敏郎・南出好史 (200U) 学校五日制における障害児の余暇利用に関する調査研究. 特殊教育学研究, 38 (2), 73-82.
- (2) 文部省 (2001) 21世紀の特殊教育のあり方について: 一人一人のニーズに応じた特別な支援のあり方について (最終報告)
- (3) 由谷るみ子・渡部匡隆, 知的障害養護学校における夏季休業に関する検討—保護者へのニーズ調査と余暇支援活動の事後評価から—
- (4) 細谷一博・五十嵐靖夫・廣畑圭介, 大学生による知的障害児のための長期休暇余暇支援プログラムに関する実践的検討—サマースクール in 函館実行委員会へのアンケート調査—
- (5) 郷間英世・藤川聡・所久雄, 知的障害者の余暇活動についての調査研究—通所授産施設に就労している人を中心に—
- (6) 安井友康, 地域で自立生活を送る知的障害者の健康と生活習慣—グループホーム利用者の自覚的健康度と生活習慣の調査から—
- (7) 南條正人・新沼英明, 知的障がい児(者)の生活の質(QOL)分析—余暇活動のその支援のあり方を中心に—
- (8) 中村尚子・池本喜代正, 都道府県レベルの障害児地域生活事業の取り組みについて
- (9) 丸山啓史, 重度知的障害の余暇の保証に関する一考察
- (10) 辻道夫, 生涯健康と余暇活動
- (11) 武田美穂・我妻則明, 学校週5日制における知的障害児の余暇生活に関する調査—盛岡市とその近郊の実態調査—
- (12) 一番ヶ瀬康子・藺田碩也・牧野暢男, 余暇生活論. 有斐閣
- (13) 一番ヶ瀬康子・藺田碩也, 余暇と遊びの福祉文化. 明石書籍
- (14) J. デュマズディエ・中島巖訳きばら, 余暇文明へ向かって—付・訳者補論「日本の余暇」—東京創元社

- (15) 松山郁夫, 障害者支援施設における自閉症者に対する余暇支援の有効性 —生活支援員に対する質問調査を通して—
- (16) 安川直史・小林重雄, 自閉症性障害児の余暇指導の実践-個別教育計画による「一人で水泳に行く」の指導-
- (17) 宮川純彦・高山佳子, 中学校特殊教育学級における障害児の余暇指導に関する研究
- (18) Paul Wehman, Ph. D, 重度の発達障害児と余暇時間についての研究. 障害保健福祉研究情報システム
- (19) 深谷昌志, 子どもにとっての学びと遊び. モノグラフ・小学生ナウ
- (20) 夏秋英房, 小学生にとっての「完全週 5 日制」. モノグラフ・小学生ナウ
- (21) 土橋稔, 子どもの生活時間調査より. モノグラフ・小学生ナウ
- (22) 三枝恵子, 「完全週 5 日制」実施後の親たちの意識—親調査を意識して—. モノグラフ・小学生ナウ
- (23) 深谷昌志, 土曜日を「対人関係を育てる日」. モノグラフ・小学生ナウ
- (24) 吉川明守・宮崎隆穂, 重度・重複障害者における QOL 評価法の検討
- (25) 平川毅彦, 「福祉教育」の目的と課題
- (26) 北海道教育大学教育学部付属養護学校<1999> 研究紀要 22 集